「研究」成果の行き先を考える

Consideration of Research Result Transmission to the Receivers in Rural Area

清水 夏樹*

Natsuki SHIMIZU

1 はじめに

本稿の執筆は、私自身がこれまでどのように農村計画学を「実践」してきたのだろうか、と改めて考える機会となった。

私は、農村計画学の「研究」は、実際の農（山漁）村に関わる諸問題の解決のための活動と考えてきたし、このことに異論を唱える人はいないだろう。しかし、正直に言えば、私は、農村計画学会で評価される「研究」の学術的価値・意義と「実践」との間に乖離が生じているのではないかという違和感を常にもちつつ、「研究」論文というアウトプットを出すことに追われてきた、という気がしている。

そのような中、農村計画学会 20 周年を機に設立された若手ネットワーク（以下、若手ネット）での議論や、農村計画学会設立 30 周年の学会誌企画の「若手会員メッセージ」¹⁾（両者を構成する会員は重なる部分大きい）、そして今回の特集テーマ企画には励まされる思いがある。違和感や悩みを抱えているのは自分だけではないのだと。以下、十分ではないが、私が、「研究」と「計画」と「実践」をめぐる、どのように折り合いをつけているのか？について述べる。

2 研究者の役割

私は、「研究」と「計画」と「実践」は、非連続な関係ではないと考える。その関係性を考えたとき、「研究」と「計画」と「実践」を行う主体はそれぞれ異なる場合が多いが、一致する場合もあると考えられる。

図 1 は、私が大学院生の時に指導教員から紹介された計画の策定（The Planning Process）

の図²⁾である。若干乱暴であるが、この図で示される「科学」を、まずは「研究」と置き換えて考えてみたい。

図中の実線の矢印は、働きかけや情報の動き、点線の矢印はフィードバックとしての働きかけや情報の動きを示す。二重線で囲まれた縦長の四角は、図の一番下に置かれた「現実の世界」の問題解決に向けた「計画」策定のプロセス（「＝「計画」」）であるが、計画策定のプロセスそのものがひとつの「実践」であるとも捉えられる。

「計画」策定では、はじめに①望み（目標）が設定される。この①望みは、農村のある課題を解決するなど、求める将来の姿を実現するための目標を示すことである。課題解決のために設定されるその目標（将来の姿の具体的な

図 1 「計画」の策定と「科学」の関係
(原図タイトルは The Planning process ; 計画の策定)

Fig. 1 The relations between "planning" and "science"
(The original title is "The Planning process")

(佐藤²⁾による図に、説明のため筆者が凡例と番号等を加えた。原典は Harris³⁾)

* 京都大学学際融合教育研究推進センター森里海連環学教育ユニット Educational Unit for Studies on the Connectivity of Hills, Humans and Oceans, C-PIER, Kyoto University

Keywords : 1) 計画策定のプロセス, 2) 働きかけ, 3) 事例研究, 4) 人材育成, 5) 多様性

イメージ)は、「現実の世界」のデータ(情報)に基づいて、「計画」策定に関わる人びとの間で共有されなければならない。目先のことだけではなく将来を冷静に見据えた説明(理論)が必要とされる。このとき、「現実の世界」からフィードバックされるデータや情報は、「研究(科学)」によっては「計画」策定と同じ地域でない場合もある。また、目標達成のための次のステップである②立案、③推論(予測)においても、データに基づいた説明がなされ、「計画」策定が具体的に推進されていく。「研究(者)」は、この働きかけ(データに基づいた説明)を行う役割を担っていると私は考えてきた。

いくつかの地域の「計画」策定を見ていると、①望みのステージの内部にも、図中の①～⑤に類似する行為が存在する。たとえば、地域の課題を元に①いくつかの目標を挙げ、それらに対してそれぞれ②いくつかの解決策を③予測し、④目標として決定(選択)し、⑤関係者間で共有するといったように、各ステージが入れ子構造になっている。

では、「研究(者)」は、何に対して働きかけを行うのか?それは「計画」策定の主体である国や地方自治体の場合もあるし、小学校区やさらに小規模なコミュニティの場合もある。また、図1において⑤実行(実施)から「現実の世界」に向かう太い矢印で示される課題解決のための具体的な取り組み(=狭義の「実践」)の主体は、「計画」が対象とする地域の、より多様な人びとで構成される。私は、「計画」策定と「(狭義の)実践」の両方を広義の「実践」と位置づけ、それらに関わる誰かを常に想定して、その人びとの役に立つ働きかけをしたいと考えている。感覚的に過ぎるかもしれないが、私の働きかけ(「研究」成果の発信)が受け手となる誰かの信頼に足るものであることを願うから、論旨の正確さや資料・方法の信頼性・妥当性に配慮する。農村計画学における「研究」は、現場の「計画」策定、「実践」の当事者という受け手があってこそ意味があるものだと考えているからである。

加えて、図1の「計画の策定」の四角の中の右側、①望みから④決定に至る実線の矢印は、点線で示されるフィードバック(④決定を①望みと照合して見直す)による「計画」策定と「実践」に関わる主体自身の働きかけである。「研究」は、このフィードバックを支援する場合もある。この他にも、「研究(者)」は、②立案、③推論への働きかけ(説明)だけでなく、たとえば、④決定された手段などを①望みや②立案に照らして確認すること(整合性の確認や代替案の提示)あるいは⑤実行の結果の見直しや次の計画に向けた情報の収集と分析を支援することなど、そのほかの図中の点線矢印で示されたフ

ィードバックを働きかけのひとつとして行うことがある。このような直接・間接的な「研究(者)」の働きかけは、「計画」・「実践」への「研究(者)」の参画であるとも言え、「研究」と「計画」および「実践」は交わるもの、あるいは「設計科学」と表現してもよいのではないだろうか。

また、図1は「計画」策定に焦点をあてて表現されているが、現実の世界、データ、説明、そして「計画」策定をつなぐ流れは循環的なものであり、PDCA(Plan-Do-Check-Action)サイクルと同様の持続的な活動とみなされる。その意味でも、「研究(者)」は「実践」と常に関わっている。

とは言うものの、これは理想論でしかない。実際に働きかけを行ってきた中で、『ここが私の研究成果の「実践」だ』と具体的に名前を挙げられる地域は、残念ながらまだない。2003年頃から関わってきたバイオマス利活用の研究では、いくつかの市町で「計画」や「実践」に直接・間接的に働きかけを行ってきたが、「実践」の持続性の検証を行うに至らなかったり、行政担当者の異動や首長の交代などにより政策が方向転換してしまったりと、働きかけの受け手を見失ってしまい、立ち消えてしまった「研究」もある。自身の力不足を感じている。

3 農村計画学研究の役割

2で述べた「研究」という働きかけは、実は大学や研究機関に所属する「研究(者)」だけが行うものではない。図1に記載されるように、灰色の四角で示されたこの範囲は、もともとは「科学」である。「計画」、「実践」のためのデータの収集と分析、それに基づいた説明といった「科学」を研究者だけのものにとどめるのではなく、このような働きかけを「計画」策定と「実践」に関わる主体自身が自らできるようにする、そのための知識を体系化すること、分析や計画手法、評価手法の開発なども「研究」の重要な役割である。「計画のための研究はつまらない」という意見も聞くが、農村計画学研究のまさに実践的な側面はこのような点にも存在していると思う。

上記のような研究のためには、具体的な事例研究の蓄積が必要である。「事例研究は、具体的すぎて応用性が低い」との批判もあるが、このような研究は、「研究」集団である学会(ここでイメージしているのは、図中の「科学」で示される四角を「農村計画学会」に置き換えたものである)を考えたとき、大きな財産であると言える。たとえば、「計画」、「実践」の現場の段取りをする人びと(自治体の担当者やコミュニティリーダー、あるいはコンサルティング企業やNPOの人かもしれない)も学会内で行われる議論の中に巻き込み、「現実の世界」

における「実践」のデータ（情報）を蓄積していくことで、現場での具体的なプロセスに効果的な「研究」になりうるのではないか。農村計画学会で発表される「研究」は、客観性、論理性を有する必要があることに異論はない。しかし、受け手の多様性を考えれば、評価の物差しは、ある程度の多様性・柔軟性をもったものであってほしいと私は考えている。

4 人材育成という学の「実践」

縁あって大学で教育を行う立場になって3年がたった。日々接する学生たちは、農村計画学を学ぶ学生だけではなく、農学・環境科学あるいは工学の大学院に所属し、土壌、森林、政策、教育、経済、建築そして動植物の生態・生態系を主たる研究対象や研究テーマとする学生たちもいる。教育に携わることになって感じるのは、現場を想定して、体系化された知識・手法の教育・トレーニングを行う場の重要性である。農（山漁）村の現場では、「計画」、「実践」を行うコーディネーターやファシリテーター、アドミニストレーターなどの役割を担う人材が求められてやまないが、農村計画学の分野として、大学・大学院でそのような人材を育てて来たと言えるだろうか。そのような人材の重要性は指摘してきたものの、「研究」の発信にばかり重きを置いて、働きかけの受け手を積極的に育ててこなかったのではないだろうか。各大学の研究室単位では働きかけに対して感度の高い「農村計画スピリッツ」をもった卒業生が輩出されてきたかもしれないが、彼らが大学を離れ農村計画の「計画」、「実践」の当事者となると、学会活動から足が遠のいてしまっているのが現実である。たとえば地方公務員になった卒業生が、当事者となった今だからこそ、蓄積・体系化されたデータ（情報）や新たな実践的研究に積極的に触れることができる場を創り出していきたいと思っている。そこで、私は、シンポジウムやセミナー、現地研修会などの企画を積極的に行ってきた。それを「研究」活動と呼べるかどうかは賛否両論あるだろうが、私にとっては、実践的な研究の一環である。

5 現場でのコラボレーションの試行

ー若手ネット合宿

若手ネットに積極的に関わってきたことも、同じ思いに端を発している。農村計画学会の20周年をきっかけに設立された若手ネットは、2001年に新潟で開催された秋期大会での座談会から具体的な活動が始まった⁴⁾。座談会では、自己紹介から、「農村とは?」「農村計画研究とは何か?」という話題に発展していった。様々な分野をバックグラウンドに持ち、立場も年齢も異なる人び

とが集まる「学会」の面白さをしみじみ感じた。参加者それぞれ頭に描く「農村」や「農村計画」は共通ではなく（だからこそ直接疑問をぶつけ合う座談会がおもしろいのだが）議論はどんどん拡散し、（今思えば）若手ならではの青臭い議論が白熱していった。この議論の場で、私は『合宿』を提案した。これは、みんなでどこか現場（＝農（山漁）村）に行き、同じ場所で同じ時に同じものを見て、情報を共有し、それぞれのバックグラウンドからどのようなことが出てくるか試してみようという提案であった。「計画」、「実践」の現場は複雑なものである。一人の研究者が得たり分析したりできるデータは限られるし、その結果を受けてできる働きかけも限られる。多様な視点でのデータ収集・課題抽出、そして働きかけのためには、多様な研究者の参加が有効だと考えた。最初の幹事役は私が買って出たが、実際は、多くの方の協力によって実現できた企画である。第1回の岩手県葛巻町（2002年8月）での合宿は、岩手大学の広田純一先生が実施されていた活動に飛び入り参加した形で実現した。この合宿は、私にとって初めて地元学に基づく「実践」に触れた機会となり、今でも学生への講義の際には熱く語ってしまう経験である。私自身の研究対象地であった第2回の大分県竹田市（2002年11月）からはほぼ年に1回、誰かの研究対象地であったり、秋季大会に合わせたご当地だったり、当初のような参加者数は得られなくなったものの、今も続いている活動である。これは、異なる専門性を持つ参加者が、チームを編成して現場の課題解決に取り組むという働きかけの形を目指せないか?という試みでもあった。若手ネットの活動成果は、学会大会でのポスター発表や学会誌記事で報告されてきたが、当初から目指されていた多様な専門家チームによる具体的な働きかけ（「研究」成果の発信）には至っていない。しかし、私自身が「研究」による働きかけで困ったとき、必要を感じたときに、農村計画学会における多様な研究者（者）から多くのヒントを得ている。実際に、これまでも若手ネットの活動をきっかけに知り合った他の研究者に直接アドバイスを請うこともあった。ワークショップのファシリテーターのトレーニングをさせてもらう機会もあった。頼れる仲間がいることに、心強さを感じる。また、若手ネットの試みは、共同研究の科研費等の申請にも発展してきている。多様な「研究」の主体による多様な働きかけが、次の働きかけを生み、答え（問題解決）につながっていくはずである。

6 おわりに

現在、私は、大学内外での学際連携・融合を目的とする組織に所属しているため、医学や哲学などの分野の研

究者とも交流する機会がある。このようなさまざまな「学」の中で「農村計画学」と自己紹介すると、農村計画学分野で当然のように言われている「現場」、「実践」、「課題解決」という言葉に、非常に関心が集まる。学界（academia）と「現実の世界」との間に立つ人という位置づけだろうか。また、異なる「親学会」に所属する研究者が所属していることから、農村計画学は、異分野連携を実践している場として受け止められるようである（もちろん、場の中に対立がないわけではない）。全く異なる分野の方々には、「（やや冷笑気味に）村おこしのコンサルティングのような仕事ですか、それを研究と呼ぶのですか」と早合点されることもあるが、「研究」の形はひとつではないだろう。むしろ、「実践」と「学（研究）」の間をつなぐことへの期待を寄せられているように思う。

農（山漁）村の抱える課題は尽きない。すべての「実践」を「研究」が網羅することはないだろう。しかし、これ

までの失敗からも学びつつ、一步一步地道に積み重ねていくしかない、最近、やっと思えるようになった。

これまで、「研究」のための現場を紹介してくださったり、さまざまな機会を与えてくださった学会の諸先輩方、仲間たちに感謝申し上げたい。

引用文献

- 1) 若手会員メッセージ (2012): 農村計画学会設立 30 周年を祝して～学会に期待すること, 農村計画学会誌, 31 (1), 74-82.
- 2) 佐藤洋平 (1998): 農村計画と住民参加—計画原論の立場から, 山崎農業研究所編『21 世紀農政の課題—価値観の転換と農業・農村』, 123-158, 農山漁村文化協会, 東京.
- 3) Harris, B. (1967): The Limits of Science and Humanism in Planning, *Journal of the American Institute of Planners*, Vol.33, No. 5, 324-335.
- 4) 吉村亜希子・斎尾直子 (2002): 農村計画学会若手ネットワーク活動の胎動, 農村計画学会誌, 21 (1), 60-63.

Keywords: 1) planning process, 2) activity, 3) case study, 4) human resource development, 5) diversity